

わが国における言語学の成立

——昭和54年度始業講演（短期大学部）——

櫻井 美智子

言語の研究であれば言語学的研究であると一般に誤解したり，実用的な語学と言語学とを混同することが多く見受けられる。言語学というのは言語を対象とする経験科学であって，通常これに言語哲学も加える。こういった意味での言語学がわが国に確立するのは19C末明治30年頃であるが，それ以前においてもわが国では言語研究が古くから行われていた。1891（M. 24）年，ドイツの Georg von der Gabelentz 教授がその著『言語学』の中で次のようなことを書いている。「日本人が独りだちしてなした知的活動の中で，言語学ほど輝かしい成果を他の学域ではおそらく見出しえないだろう」と。このことはその評価もさることながら，当時既にヨーロッパにも知られた日本人の言語研究があったことの証しであると思う。今日は「言語の科学」（Science of Language）という意味での言語学が19C末にわが国で育成されるにいたる事情を，古い伝統的な研究にもふれて概観してみたいと思う。

1

17Cの頃から下川契沖，賀茂真淵，本居宣長らをはじめとする国学者たちによって，奈良・平安時代の古典の書きことばが研究されていた。特に契沖には古典注釈と語学的業績とがあり，その語学的研究として先づ挙げられるのは1695（元禄8）年刊の『和字正濫鈔』^{ワジシヨウランシヨウ}（「和字（仮名）の遣い方の濫れた

のを正す」という意) 5巻である。この中で契沖は中世を通じて規範となっていた「定家仮名遣」を、『万葉集』『和名抄^{ワメヨウシヨウ}』などの古典の文献の事実とてらし合わせて、根拠薄弱であると指摘した。彼が上代の文献に発音によるかなづかいの区別があるということに気づかなかった、というような後世補訂されるべき点もあったが、このような発見と、事実を帰納的に処理して客観的に判断を下したその方法は、国語学史上画期的なことであるとされている。

実はこの契沖に影響を与えたといわれる悉曇学が更に古くからあった。これは悉曇(Siddham)といわれる文字——古代インドで使用されていたブラーフミー文字(Brahmi lipi)から4C頃グプタ(Gupta)文字が生まれ、それが6C頃発達した文字——が天平年間(8C中頃)にわが国に伝えられ、仏教の教典翻訳の必要から語学として研究されていたのである。しかしすでにインドにおいてインド古来の哲学的音声神秘観に彩られて、文字、音声は深淵な意義を与えられていた。それで奈良・平安時代はむしろ教義の面から悉曇研究がなされ、880(元慶^{ガンキョウ}4)年、安然が大きなスケールの構想のもとに当時の諸文献をつぶさに検討して論考した、『悉曇藏』を著わしてわが国悉曇学の基礎を築いてから、言語としての悉曇研究が盛になって来ている。それと相俟って国語の音韻について、又鎌倉時代には漢字音についても鋭い観察に基く研究がなされるようになった。しかし鎌倉時代・室町時代は悉曇学そのものは衰え、江戸時代文芸復興の風潮にのって再び抬頭し、1765(明和2)年に慈雲が編纂した『梵学津梁^{ボンガクシンリョウ}』1,000巻の一部が刊行された。これは古来の悉曇学にあきたらず、梵語の音韻・語法の真相にせまって梵本を直接解読する鍵を得ようと志し、上は古い『見葉^{バイョウ}』から下は印度・西域紀行の類にいたるまで梵語の資料となるものは細大もらさず蒐集して、これに自分で書いたもの編集したものを加えて集大成したものである。これによって梵文が始めて読解できるようになった。悉曇は近代言語学からみても殆ど変更の必要のない完全な音韻組織なので、これを研究することによって国語音韻に対する観察も当然客観的に又緻密になったであろうことは想像に難くない。

しかし慈雲以後悉曇学は余り発達せず、明治期になって西欧の梵語学がとり入れられてからは殆ど顧みられなくなっている。

又契沖と同じ頃、系統はちがうが、歴史学・地理学・故実など多方面に業績をのこし、彼自身漢詩人であり文章家でもあった新井白石の著作の中に、語源研究のもの（『東雅』1717）、文字研究（『同文通考』1760）、綴字研究のもの（『東音譜』1720）、外来語研究（『采覧異言』1713、『西洋紀聞』1715）、古代の人名・地名の研究（『古史通』1716）など直接間接言語学に関係少からぬものがある。語源研究の『東雅』を例にとってみても、その序論で、それまでの常識的解釈を排し歴史的考究を重視する態度をはっきりさせて、語源解釈法に一定見をもち、彼の見識が高く健全であることを示している。更に今日の語根、接頭語などの概念のアウトラインとでもいうべき考を既にもっていたことが窺える。ヨーロッパで近代言語学の確立に貢献した Franz Bopp や Jakob Grimm たちの学説の多くが18C後半に世に出たことを考えると、約100年前に東洋の一小島でこれだけの研究がなされていたことは驚嘆に値する。ただヨーロッパにおけるようにその研究が組織的に受継がれて発展するということが白石の場合なかったのは残念であった。

2

一方、13Cにベニスの Marco Polo が東方旅行をしてその見聞録を書き、未だ見ぬ国黄金と真珠の国ジパングをヨーロッパに紹介して以来、アフリカの南端喜望峰をまわって東に進んで来るもの、又反対側の西航路をとってマジェラン海峡を通過して来るものなど、ポルトガル人、イスパニア人、オランダ人らの東洋に対する関心は強いものがあつた。わが国の本州、九州、沖縄にはキリスト教宣教のために、又通商を求めて来航あるいは漂流、密航するものが次々とあつた。そういう人たちが帰国後書いた航海記の附録に日本語彙を収録したり、外国人宣教師が自分たちの学習のために彼らの母国語と日本語との対訳辞書や文法書を著わしたものが既に16Cにみえている。彼らの日本語研究は始めは全く実用的なものであつたが、年月を経るに従い次第

に日本語に通曉して立派な学者も出て来るようになり、その研究のなかには西欧の学界のみならずわが国の明治以後の言語学にも、次の研究をその上に築く礎となったものもある。同じ頃キリスト教関係書などが宣教の目的で翻訳され、一般書ではイソップ物語（『イソポのフワブラス』）の翻訳が特に古く、1593（元禄2）年天草で刊行されている。

1641年以降200有余年の鎖国が続くが、通詞たちや長崎出島の和蘭商館・地方の藩学ではポルトガル語・オランダ語が学ばれ、のちフランス語・英語・ドイツ語・ロシア語などがとり入れられていた。しかしこれらの外国語の習得は沿岸に出没する黒船に対する国家不虞の用に備えるため、第二に西欧の新知識新技術を学ぶ手段としてであり、洋学は皆写本で秘書であった。辞書・文典の刊行を促す機運を醸してはいたが、海外の本国版を翻刻したもの、あるいは本国版を底本にして日本語にしたものが使われていた。その中で注目されるのは志筑忠雄（中野柳圃）が1804年頃著した『和蘭詞品考』で、彼自らオランダ語文法の骨子を把握して主に詞品（parts of speech）について述べた。著者の学者的慎重さから人に示すことを長い間避けていたため成稿年代が明らかでない。この写本の写しが京都大学図書館に今ものこされており、美濃紙十数葉和綴のもので彼の苦心のあとがうかがわれる。名詞を自立名語とし男・女・中間と gender に分け、動詞は為事語、代名詞の一人称、二人称と今称するものを一番人、二番人、三番人と分けたり、形容詞を傍寄名語、副詞を傍語などオランダ語文法の術語を訳した最初のものであろう。その後わが国で出された最初の英文法の本『英文鑑』も原著の英語からではなく、一度オランダ語に訳されたものからの重訳であることを考えても、当時はオランダ語を通して英語・フランス語を学習していて、如何にオランダ語が重要であったか察せられる。この点においても柳圃の詞品考がのちの蘭学者・英学者たちに与えた影響は小さくなかった筈である。鎖国中でありながら、前述のような国防上の理由から主にオランダ語・英語が学ばれたが、辞書と称するものも決して今日私たちが考える体裁を備えたものではなく、むしろ語彙集といったものであった。

明治期を，東京大学に博言学科(今の言語学科)が創設された1886(M. 19)年までを第一期，1886年から1894 (M. 27) 年までを第二期，それ以降を第三期と区分して，少し詳しく述べてみたいと思う。

I. 1868 (M. 1) 年～1886 (M. 19) 年

II. 1886年～1894 (M. 27) 年

III. 1894年以降

1894 (M.27) 年は東京大学博言学科を1888 (M.21) 年に卒業した上田万年がヨーロッパから帰国し，始めて日本人による国語学史の講座がもたれた年で，この年以降即ち第三期以後日本の言語学が独り歩きをはじめたと考える。

第一期は前期に引続き洋学，とりわけ蘭学に代って英学が盛になる。イギリス公使館員として来日した William George Aston, Ernest Mason Satow やアメリカの宣教師 James Curtis Hepburn など外国人による日本語文典や対訳辞書などが刊行される。又国字問題も盛に論じられ，のちの文部大臣が国語を全廃して英語を以てこれに代えようと主張したのに対し，アメリカの言語学者 Whitney に反対されたのもこの頃である。ヨーロッパでは，19C初期における印欧諸言語(Indo-European languages)の親族関係の確立，印欧諸言語間の音韻規則の発見など次々に発表される輝かしい業績につづいて，この頃になると，その音韻規則の例外まで科学的に分析して「音韻規則に例外なし」と彼らにいわせるまで精密化していた。このような大勢の中で真宗の僧侶南条文雄と笠原研寿が梵語研究にイギリスに留学するのは1876 (M. 9) 年である。先に述べたように，日本には古くから悉曇学と呼ばれるものがあったが，シナ・日本の悉曇学は現代的意義における梵語ではなかった。それは主として個々の文字や書法，読法を教え字門字観と称して梵字一つ一つの秘義を明らかにしようとしているが，語法上の説明は不十分であった。

それならば近世梵語学とはどのようなものであるか。先づ印度から考えて

みると、印度人は元来、自国語の観察に長じており、印度には紀元前4Cに Pānini の梵語文法がある。これは音韻や文法の諸規則3996を韻文でまとめた簡にして要をつくしたもので、「人間の知性の最高の記念碑の一つ」と Bloomfield によってたたえられている。周知のようにこの社会はカーストに分かれ、最高の特権階級の文化の表わす言語の純粹性を確保するために、古代から文法学校をたてて言語を観察して記述する文法家の育成を図っていたので、Pānini 以外にも何人も文法家がおおり、言語事実を客観的に精密に記述することに努めていた。しかしもっと科学的な梵語研究は却って近世ヨーロッパで発達したのである。即ち、1786年イギリスの William Jones が梵語とヨーロッパ諸語との関連性を確立して以来、特に19Cになって、イギリス・ドイツ・フランスに優秀な梵語学者が輩出し、新しく興った比較言語学との関連で多くの言語学者の関心を引いた。殊に梵語・梵文字の研究の初期の開拓は、植民地の関係上イギリスの学者の努力に負うことが多かった。

Friedrich Max Müller はドイツから帰化したイギリス人である。ドイツの Dessau に生まれ、Leipzig, Berlin, Paris で梵語学・比較言語学を学んだが、のちイギリスに帰化し、梵語、ドイツ語、ロマンス諸語について講義するばかりでなく、イギリスに始めて比較言語学・比較神話学・比較宗教学などをもたらした、その分野での開拓者でもある。当時の言語学界では August Schleicher の流をくみ、アメリカの William Dwight Whitney と展開した論争は言語学史上有名である。このような広い知識と深い洞察をもった梵語と比較言語学の権威者について南条・笠原は研鑽をかさね、師と経典の共同研究や梵語経典の目録作成、翻訳などの共著をなすなど充実した留学生活を送っている。これは誠実で勤勉な二人の人柄にもよるであろうし、Max Müller の慈愛と適切な指導にも負うところが多いが、何よりも当時 Max Müller が貪慾なまでに古い梵語経典を探しており、たまたま Dr. Joseph Edkins が日本から持帰ったものの中にサンスクリット同義語を伴ったシナ語々彙と日本語訳のあるのを見て（辞典のようなものであったらしい）、このようなものが有用であったとすれば、梵語を日本の仏教徒が学ん

でいた時代があった筈であり、日本にはもっと梵語の宝があるのではないかと着目していた折も折であったのである。若い僧侶が梵語とパーリ語を学ぶために、そして原語で經典を理解できるようになるために、はるばる日本からやってきたことは Max Müller 自身幸運であったと述懐している。彼のこの着想は見事にあたって、二人に頼んで日本から古い經典を送って貰うことになる。長いこと探し求めていた梵語經典は印度から中国へ、中国から日本へ運び出されていた。独特のネパール語アルファベットで書かれ、シナ語訳と日本語音訳のついているものであった。Max Müller はこのことで非常に勇気づけられた。梵語あるいはパーリ語で原典を読むことによって、仏陀の最初の教とその後発展や墮落を経た仏教とのちがいを知ることができるので、そのためには如何なる努力も助力も惜しまないと言って、更に中国・朝鮮・日本に渡った經典を原典・写本を問わず求めつづけた。一方笠原研寿は途中病をえて帰国したが、梵語教典の蒐集とその校合にみせた南条・笠原両氏の不撓の熱意と献身、そして蟄居した仙人の様な日常生活の中での研鑽は Max Müller を驚かせたようである。Max Müller が「オックスフォード選書」の中に公刊した無量寿經・阿弥陀經・金剛般若經・般若心經等はこの二人の日本人の助言によっており、Oxford 大学が当時この学界で覇を唱えたのも Max Müller と南条文雄との協力によるといえる。南条文雄の『英訳明蔵目録』『英文十二宗綱要』はヨーロッパにおけるこの分野での基礎文献とされている。この様な大きな足跡をのこして南条文雄は1884 (M. 17) 年に帰国、翌85年2月東京帝国大学文学部に梵語学が開講されるや初代の嘱託講師となり、91 (M. 24) 年9月印度渡航のため辞すまでこの任にあった。その後ドイツ人 Karl A. Florenz が梵語学を講じていたが、1901 (M. 34) 年から26年間東京帝国大学で梵語・梵文学を講じた高楠順次郎も7年間のヨーロッパ留学中5年間を Max Müller に師事している。その間『仏説觀無量寿經』を英訳し、故笠原研寿の遺業をついで義浄撰『南海寄帰内法伝』の翻譯・註解を完了している。のち、高楠順次郎は大正期になって弟子の辻直四郎とともに梵語学を中心に日本の梵文学・印度哲学を世界的

水準にまでたかめたが、わが国の近代梵語学研究はまさに Max Müller 門下の手にあったわけで、梵語学講座が東京帝国大学にしかなかった当時を思うと、Max Müller の影響を疎かにすることはできない。西の涯のイギリスからはるばる移し植えられた梵語学を、日本という土壌で培い育て、日本の指向に一致させて、日本の梵語学・梵文学を樹立したのは高楠順次郎であった。

1886 (M. 19) 年、東京大学は組織を改め、帝国大学と改称するとともに文科大学に始めて博言学科を設けた。これは、当時の関係者たちの高い見識と並々ならぬ努力によって、やっとな機運をえて実現されたのである。そして、博言学（今日の言語学）の講義と日本語学を講じるために Basil Hall Chamberlain が迎えられた。日本人が自国の言葉や文法をイギリス人から学ぶということは誠に奇異な感がするが、それは Chamberlain が1873(M. 6) 年来日以来12年の間に言語学者としての才能を示し、わが国の上代文学・古語などについて、特に古事記・日本上代詩歌等の英訳・論文を発表しており、その組織的科学研究にすぐれた創見と蘊蓄を既に認められていたからである。また当時の日本に、科学的方法論に立脚した日本語研究が日本人によってなされていなかったからでもある。しかし Chamberlain は帝国大学での講義も僅か4年で、1890 (M. 23) 年9月には眼病のため辞任し、一時帰国するのであるが、翌年大学より名誉教師の称号を与えられている。彼は生来病弱である上眼を患い、幾度か帰国しては来日し、通算35年ほど滞日して、調査研究をし、論文その他の著述をのこしている。ここでは日本の言語学界に際立った意義をもつものだけを検討してみたい。

第一に挙げられるのが日本語古語の研究である。彼は東京に来ると、江戸時代の面影を多くとどめた芝西久保広町の曹洞宗青竜寺に居を定め、日本古典の研究を志した、旧浜松藩士荒木某に教を受け、古今集から読み始めたという。また鈴木庸正について万葉集・枕草子等や謡曲・狂言の類を学び、自らも和歌を詠じて橘守部の嗣子冬照の未亡人橘東世子の歌会に列し、橘守部の遺著で未刊の稜威道別・稜威言別を橘家で借覧し、その研究を深めた。こ

の様な研鑽を経て、1877 (M. 10) 年には「枕詞及びいいかけについて」、翌年には「狂言記にあらわれた中世俗語について」(これは足利時代の言語研究として最も早いものである)などの論文をいずれも英文で発表した。その他大和物語や万葉集・古今謡曲等の抄訳などもあるが、『英文古事記』(83 (M. 13) 年)はなかでも名著といわれている。この分野でもう一つ特記すべき研究は、弟子の上田万年に資料を検討して貰ってまとめた「日本上古語彙」(1888 (M. 21) 年)と題する論文である。これは今日でいうインフォーマントを使うという慎重な客観的研究方法によっている。当時上海や横浜で外交官や宣教師などによって盛に行われていた東洋研究の中のいくつかの論文で、日本語の単語がシナの単語から出たものだと説いているものがあり、それに対して、その比較方法が歴史的検討を経ていない表層的なものであること、言語の比較研究をする時は両語の古代言語を根本的に研究し、外来的なものとの固有的なものをよく見きわめるべきであることを力説している。この方法は今日では当然の知識で鉄則となっている。その中で古事記・日本書紀・万葉集などの古典から約1300語彙を摘出してこれを英訳し、その語源的解釈をほどこし、当時の推定古代発音をつけている。borrowing hypothesisを肯定させるものは文法だけでないこと、どのようにして借用を可能ならしめたか歴史的にも説明できなければならない、と軽々しく結論をだすことをいましめている。この論文は量においては小さいが、質的にはわが国言語学史上画期的なもので、特にその序論として比較研究の方法を論じた点、単に東洋研究者のみならず、当時の学界、特に国学という狭い殻に閉じこもっていた日本の言語研究者の眼も覚ませたであろう。彼の古語・古文の研究は単なるそのテーマへの興味だけのものでなく、彼がこれから築きあげる研究の広い底辺となる基礎であったのである。又時代的にも来日後ごく初期の研究であった。

第二に、今述べた古語の研究と対照的に、彼の研究分野が口語や近代文語の文法にもあったことである。1886 (M. 19) 年には定評のある『簡易日本文語文典』がロンドンで刊行された。これは日本語の古典や言語学的研究の

ためでなく、現在用いられている文語を取扱って、外国人に現代の文学や手紙を読むのを可能ならしめるためのものである、とその序に書かれている通り、非常に行届いた文法書で、1922年アメリカ人 Major James Garfield McIlroy によって改訂されるまで30年余り決定版的性格をもって初版のまま愛用された。すなわち、本文第一章は日本語の発音体系について述べ、アルファベットと発音との関係や濁音を生ずる音声学的環境など科学的分析がなされている。第二章以下は所謂文法であるが、外国人に特に難しい文語を適確に記述し、精密に規則化している。この様なところに彼の言語に対する洞察力の鋭さや、体系化する才能をみることができる。翌87 (M. 20) 年には日本語で書かれた『日本小文典』がある。この文典は文部省の依頼を受けて著したものであるが、印欧語文典にみられるアカデミックな方法で簡潔にまとめられている点、従来の日本人による文典と趣を異にする。これまでは『玉の緒』や『詞の八衢』を祖述したものや英文典をそのまま模倣したもので、日本語を客観的に記述したとはいえないものであった。それ故わが国の文法研究者に与えた衝撃と影響は大きく、その後の国語学研究勃興の導火線になったといわれている。その他文法に関する二つの小論が1885・86 (M. 18・19) 年の日本アジア協会紀要 (*Transactions of the Asiatic Society of Japan*) にのっている。一つは先人の動詞の 'root' に関する見解を批判したもの、もう一つは動詞連用形をうける「て」というテニヲハを従来 participle と解釈していたが gerund と考えた方がよいという意見である。

当時俗語と称して軽んぜられていた口語に関しても88 (M. 21) 年『日本俗語文典』(ロンドン、東京刊)の著述をはじめ、日本アジア協会紀要にのった「狂言記にあらわれた中世俗語について」(78 (M. 11) 年)、「会津方言考」(81 (M. 14) 年)などがある。この俗語文典は翌年第2版、続いて第4版まで版を重ねて、フランス語訳も1901年に出された。口語文典については既に1869 (M. 2) 年に William George Aston の『日本口語小文典』(長崎刊)があって、決して最初のものではないが、Aston のものが僅か40頁の小本であるのに対して、Chamberlain のものは485頁に及び、理

論編と実用編から成っている。古事記・日本書紀など古い文語に通じていながら、いち早く俗語とさげすまれていた口語にも強い関心を示し、すすんで文典を著わしたのである。日本の口語文典が国語調査委員会で着手されたのが1906 (M. 39) 年頃といわれているから、約20年先んじている。話しことばの方が書きことばより古く、また広く用いられている事実に基礎をおいて、70年後の20世紀の言語学が、その研究資料を書きことばより話しことばを優先させている実状にてらしても、Chamberlain の識見は卓越していたといわざるをえない。

第三はアイヌ語研究である。この分野でも彼は開拓者ではない。既に1805 (文化2)年にアイヌ語学の鼻祖となる『藻汐草』が蝦夷通詞上原熊次郎と漁場の支配人安部長三郎によって著わされ、その後イギリス人やアメリカ人その他の人々によってアイヌ語の調査・研究がなされていた。しかしそれらはアイヌ語が珍しい言葉であるとか、滅びそうな言葉だからというアイヌ語そのものに対する好奇心や、宣教のための手段としての研究であった。Chamberlain のアイヌ語に対する態度は、日本語学のためのアイヌ語研究という当時では異色のものであったのである。

かなり早くから Chamberlain は日本列島を取巻く隣接諸民族の言語に眼を向け (1883 (M. 16) 年の「国語学雑考」や86 (M. 19) 年の『簡易日本文語文典』の序文の中で、朝鮮語が親族語の可能性が高いということを日本の古い言葉と較べて主張している)、隣接諸言語と日本語との関係をさぐり、日本語の系統を明らかにしようという姿勢が見られる。その研究の一環としてのアイヌ語研究であるが、いくつかの論文やアイヌ民話翻訳などの中で、1887 (M. 20) 年帝国大学文科紀要第1冊に載った「アイヌの研究からみた日本の言語・神話及び地名」という論文はこの分野での彼の主著と目されている。これはアイヌ語と古代日本語とを綿密に比較して両者の間に関連・類似の少ないこと、特に音声学的には非常に類似点のあることを認めながら、それはむしろ偶然の相互影響と考えるべきで両語間に親族関係はないと結論している。その証拠として15項目を挙げている。その主な理由は、第一に、

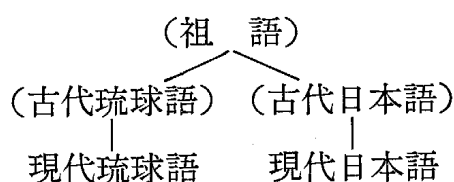
日本語における助詞（テニヲハ）が *postposition* であるのに、アイヌ語ではその様なものもあるが英語・ドイツ語のように *preposition* であるということ。第二に日本語のテニヲハは単語や句の頭に来ることは全くありえないが、アイヌ語のテニヲハは単語あるいは句の前に来ることが可能であるということ（金田一京助によれば、これはアイヌ語のテニヲハのようなものがまだ純粹にテニヲハに成りきっておらず、副詞のようなものだから可能なのだ、ということである）。更にアイヌ語には語頭に a 音をつけて形容詞を他動詞にしたり、動詞の受身形をつくったりすることがあるのに対して、日本語にはそのような接頭語はない、と指摘している。その他いろいろ証拠を挙げたあと、Chamberlain の発見ともいふべき、二十を単位とするアイヌ語の数詞の特徴について述べ、日本語とアイヌ語の数詞のちがいはもともと二つの民族が物を数える習慣を異にしていた証拠であるとしている。研究がすすんで行くと訂正や補充をしなければならないことがどの分野でもあるが、今挙げた観察は恐らく変らない事実であろう。一つの言語に興味をもって比較していくと、ともすると類似点ばかりに気をとられて客観性を失いがちであるが、Chamberlain は最初の研究で両語間のこの二つの点が根本的にちがうと断言している。但し、この論文の後半の神話や地名に関する分析は、言語について示した周到さや緻密さに欠け、かなり大胆な結論で、これには多くの批判があることと思う。同時に同じ紀要に発表された蝦夷及びアイヌに関する文献目録は 465 種にわたる書目で、当時としては非常に充実したものであった。Chamberlain はこれらの文献を自らあつめ、その一つ一つを実際に検討し、現地調査をふまえて、アイヌ語の語法や特徴を例証した。その研究は、それまで少数の人たちだけの関心で学界になおざりにされていたアイヌ語に脚光をあてることになり、その上日本語との関連性という観点にも多くの人の興味を喚起し、後進を啓発したことであろう。

第四に Chamberlain の言語研究の分野で最大の業績をのこした、琉球語に関する研究がある。彼は病気のため 4 年間教えた帝国大学を 1890 年 9 月退官したが、琉球に関する研究はすべてその後のもので、93 年以後数年にわ

たつて続々とこの分野の論文を発表している。なかでも1895 (M. 28) 年6月日本アジア協会の会合で読まれ、やがてその紀要にのった「琉球語文典と辞典に寄与する論文」は日本語と琉球語との親族関係 (affinity) を確定的にした不朽の論文である。

Chamberlain は1892 (M. 25) 年の三度めの帰国のあと、93年3月に、病弱の身でありながらわざわざ琉球に渡り、約一カ月主として那覇に滞在して資料蒐集・調査に当たっている。この時教育ある首里人数名から研究資料の一部をあつめ、帰京後も続けて95年まで首里出身の一知識人から琉球語を習っている。琉球ははやくからヨーロッパ人探検家の関心の対象となっており、寄港・漂着などによって彼らが見聞したことが旅行記に紹介されていた。Chamberlain の母方の祖父 Captain Basil Hall は軍艦 *Lyra* 号の艦長として1816 (文化13) 年朝鮮や琉球沿岸を調査し、帰途セント・ヘレナ島で Napoleon Bonaparte に琉球について話をした、といわれている。Captain Hall はこの航海の記録を『朝鮮西海岸及び大琉球島航海探検記』(1818年ロンドン刊) として出版し、巻末に附録の一つとして、同行の Herbert John Clifford に、琉球語彙・文とその英訳、琉球語と日本語・琉球語とインス語の語彙比較などを朝鮮西海岸住民から得た語彙などと一緒に観察したままのせさせている。この本が Chamberlain に影響を与えない筈はなく、前述の「琉球語文典と辞典に寄与する論文」の序文でこういつている。「祖父 Captain Hall の旅行記で僅かに琉球語の紹介があったが、それ以来77年間、石地に落ちた種子の様に、琉球語に触れた如何なる欧文文献の発表もなく、琉球現地の人々も文化的にはすぐれているが文法という言語科学の存在さえ知らないので、敢えて至難な研究課程を経て発表する」と。ここで試みられる琉球語の文法的分析は主として日琉語の比較という観点からなされたもので、ここにおいても往年のアイヌ語研究の時と同じ研究方法がとられている。

そして両言語の関係を次の図のように示し、カッコ内の言語を仮説としてたてた。



今日私たちがみる標準琉球語は日本語に近いが、または日本語そのものであるが、ここでいう現代琉球語とは、時代の推移とともに隅に追いやられ消えつつある土着の琉球方言のことである。この現代琉球語と現代日本語は、細かな点で著しい相異があるようにみえても、古語における両語が同一祖語 (parent language) から出た姉妹語 (sister language) であるということ、両語の文法では語形論・統語論のいずれにおいても、スペイン語とイタリア語間と同じ位の一致がみられること、を音声組織から文法にいたる両語間の相違・類似を明らかにして例証している。

そしてこのことから、日本語が従来信じられて来たような中央大和地方の先住民族の言語ではなく、最後に日本に到来した征服民族の言語であることを証明するものだ、と次のようにいっている。「琉球人はその体質日本人に酷似してモンゴリアンのタイプを有している。彼らの祖先はかつて共同の根元地に住んでいたが、紀元前三世紀の頃大移動を企て、対島を経過して九州に上陸し、その大部隊は道を東北にとり、ゆくゆく先住民族を征服して、大和地方に定住するようになった。その間に南方にさまよいつつあった小部分の者は恐らくある大事件のため逃がれて海に浮び、遂に琉球諸島に定住するに至ったのであろう。これは地理上の位置でも伝説の類似でも言語の比較でも容易に説明される⁽¹⁾。」この言語学的直観ともいえる推論を、沖縄学の父といわれる伊波普猷も大体支持し、「九州の南部にいたものが神武天皇の頃⁽²⁾ (西暦の初頃) ある大事件のため南下したものと思う」と、かなり具体的に約2000年前同胞と手を分ったと伊波は説明している。この分岐年代についてはいろいろな方法で算出がこころみられている。このことが何らかの史実を反映するのかどうかについての考察は専門家の判断に委ねなければならない。

琉球語と日本語の類似については、恐らく江戸時代日本語を習う必要のあ

った琉球の人々によって既に気付かれていた筈である。しかし日本語と琉球語との関係を言語学的に表明し、両語を同一の祖語から分岐発達した姉妹語としてその学問的研究を行ったのは Chamberlain のこの論文が最初であろう。琉球語の母音が標準語の母音と異っているということは、早くも喜舎場朝賢『東汀随筆』等に見えているが、Chamberlain はこれを古代日本語のなごりとして日本祖語の母音を a, i, u の三つであると推定している。非常に綿密な研究をしていながらこれは誤りであった。Chamberlain と入れ代りに1914(大正3)年に来日したロシアの音声学者 Evgenij Dmitrievich Polivanov は資料を Chamberlain のこの論文に拠って書いた同年の論文「日本語・琉球語音声比較概論」の中で Chamberlain とちがった説をとっている。すなわち、日本語の母音の音声区別の方が琉球語より古い状態を表わしていて、琉球語の祖先も日本語の様な古い状態をそなえていた、と推論して日本語の五母音説をとらえた。Verner の法則からみてもこの方が正しいとされている。このように後世訂正補充されるべき点もあるが、彼の研究で琉球語と日本語とが親族関係にあることを確定的にしたことの評価は動くことがないであろう。今日それから100年を経ようとしているが、まだ琉球語以外の確実な姉妹語は発見されず、日本語の系統も証明されていないのが現状である。

Chamberlain の言語学に関する研究分野は以上のように多岐にわたっているが、一貫していえることは、彼が日本語を古代に溯って研究し、朝鮮語・アイヌ語・琉球語を対象としても、日本語研究ということを常にその基盤としていたことである。対象語への単なる興味でなく、日本語との比較・対照をこころみ、日本語の系統をたずねるためであった。民族移動の可能性を考え、仮説をたてて次々と日本を取巻く周囲の諸民族の言語を研究したが、表面にあらわれた類似性が実は偶然の一致に過ぎないもの、又表面は一見異なるものが古語において同一性をもつものなど、細心精緻の比較方法によってすすめられている。このような段階を経て琉球語が日本語と親族関係にあって同一の祖語をもつという、言語学史上銘記されるべき論文が発表された。

その姉妹語と日本語との比較によって、今までの方法では溯れなかったところのもう一つ前の古い原始日本語 (Proto-Japanese) へ溯って研究しようという意図があったのである。この時代はこのようにして来るべき時代の草わけであり、日本の言語学が独りだちするまでの準備期であった。

4

明治期以降、日本の言語学は西欧の言語学に負うところが多い。日本独自の伝統的な言語研究の地盤がありはしたが、19Cにめざましい発展をとげた西欧の科学的な研究方法の成果を理解して受入れるには時間を要した。明治第二期は西欧の近代言語学移入の時代とってよく、第三期になってその新しい方法で日本人による研究がこころみられる。

1888年の大学卒業の年、師の Chamberlain をたすけて「日本上古語彙」を著わした上田万年は、その後ドイツに3カ年、つづいてフランスに6カ月留学し、94 (M. 27) 年帰国、同年9月より帝国大学で国文学史を、96 (M. 29) 年からは博言学の講座を担当し、ここに日本人の本格的な活動が始まる。上田万年は95 (M. 28) 年に『国語のため 第一』を出し、数年後にその『第二』を出版したが、その本の扉に書かれたスローガンにもあきらかなように、彼には国家と民族と言語の三つを一つに考える思想があり、国運の隆昌は国語・国字の改善がその基礎にあるべきで、国語を愛護尊重すべきことを力説している。これには明治20年代の青年学徒に外国語、特に英語を学ぶ者が多く、国語が軽視されていたこと、又日清戦争などで国民精神作興運動があったことなどが背景になっている。彼自身国語の統一、標準語の制定、仮名遣の改定、漢字の制限、ローマ字の普及など実際の国語改策にも熱意を示した。大学では留学中に学んだドイツの印欧語比較言語学・言語史学をふまえて、音声学及び Hermann Paul の『言語史原理』を講じ、国語の系統及び国語史研究に先鞭をつけた。国語のハ行子音が $P \rightarrow f \rightarrow h$ と変化したことを考証して（「P音考」）国語音韻史研究の道をひらき、わが国における言語学・音声学を文字通り開拓した最初の日本人である。

1899 (M. 32) 年から30年余り博言学講座を担当した高楠順次郎については、既に Max Müller の弟子で日本における梵語学を世界的水準にまで高めるのに貢献したと述べた。明治の後期は、上田・高楠の担任中後に活躍する多くの言語学者が東京帝国大学を卒業している。すなわち、台湾語及びインドネシア語の小川尚義、英語の岡倉由三郎、日鮮両語比較研究の金沢庄三郎、満洲蒙古語の藤岡勝二 (1905年より上田万年の後任として言語学講座担当)、ロシア語の八杉貞利、パーリ語の長井真琴、梵語の辻直四郎、国語学の新村出、橋本進吉、アイヌ語の金田一京助、琉球語の伊波普猷、朝鮮語の小倉進平、方言研究の東条操などである。彼らはそれぞれの分野を近代言語学の研究方法で自らきりひらき、その学問の礎を築いたパイオニアたちである。

<注>

- (1) 『伊波普猷全集』 (平凡社 S. 49) 第一巻24頁の伊波普猷訳による。
- (2) 『伊波普猷全集』 (" ") 第二巻39頁。